

しいむじな

発行

千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先

〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL:043-265-3111

<http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/>

2022(令和4)年3月発行

2022・春

76

特集

房総丘陵の鳥類

① ツミ♀ 長柄町中野台
(撮影:川嶋静雄 2021.12.18)

② キビタビ成鳥 市原市大福山・梅ヶ瀬溪谷
(撮影:加藤恵美子 2009.6.4)

③ アオバズク 長柄町中野台
(撮影:川嶋静雄 2021.7.11)

④ リュウキュウサンショウクイ 鴨川市清澄寺付近
(撮影:加藤恵美子 2018.5.26)

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業の一環です。観察会を開催したり、旧君津市立三島小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点として、地域の方々のご協力をいただきながら、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

房総丘陵の鳥類の特徴は、冬に観察できる種類が多いことです。特に、アオジやクロジなどのホオジロの仲間、越冬期に見られます。マヒワ、アトリ(次頁写真⑤)やイカルなどのヒワの仲間も冬を越します。アカマシコやギンザンマシコが記録されることもあります(青木・桑原1994)。ヒワの仲間は、数種で混群を形成することがあります。冬の鳥類で変化が見られる例としては、ツミが挙げられます。近年、冬にも夏鳥のツミが記録されるようになりました(写真①)。

この特集では、房総丘陵に生息する鳥類の様子がどのように変わってきたかをご紹介します。

(桑原和之)

第76号 2022(令和4)年・春

しいむじな

4

『教室博日記』の紹介

房総の山のフィールド・ミュージアムのウェブサイトには『教室博日記』というコーナーがあります。学芸員が房総の山を歩き回って見つけた生き物や地形・地質や歴史・民俗などを写真と文章で紹介しています。毎月、数本から十数本の記事を追加していますので、ぜひ、のぞいてみてください。

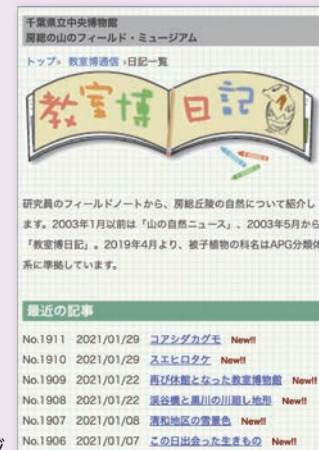


教室博日記のQRコード

QRコードから「房総の山のフィールド・ミュージアム」のサイトに入り、「更新情報」にある「教室博日記」をクリックすると目次ページ(画像)が開きます。あるいは、http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/news/news_index.htm を開いてください。

(尾崎煙雄)

教室博日記の目次ページ



連載

小櫃川流域の生きもの

アオサギ ~おしとやか?~

みずあさぎ はぎ 夕風や水青鷺の脛をうつ 与謝蕪村

アシが生える河口の浅瀬で、アオサギがえさを探して、そろり、そろりと歩く姿は、涼し気で、おしとやかで、絵になる光景である。ところが、冬の河口域の塩沼(潮が入り出る沼)で、アオサギが「ギャ、ギャ・・・」と鳴き、バタバタしながら飛び上がった。眼が見開き、ひきつっているように見えた。人と言えば血相を変えている感じだ。そばから音もなくカラス大の鳥が舞い上がった。飛び姿勢からタカの仲間とわかったが、シャッターを切って、液晶画面を見るとぎょろりとした眼をこちらに向けている。「オオタカだ」。オオタカが自分よりはるかに大きなアオサギを襲ったが、捕獲できずに上空に舞い上がったに違いない。オオタカに襲われた時のアオサギの眼、異常な鳴き声と慌てた飛び方に野生生活の厳しさを垣間見た気がした。また、アオサギは湿地で大きなウシガエルをくちばしではさみ、頭から飲み込んでいたのを見て、決しておしとやかなサギではないと思った。

アオサギは2000年発行の千葉県レッドデータブックではCラ

MEMO アオサギ
全長約93cm サギ目サギ科

日本最大のサギ。干潟、河川、水田にいて、魚、カエル、ザリガニ、ネズミなどを食べる。ギー、ギーとしわがれ声で鳴く。



写真1: アオサギ 2007.11.17 木更津市



写真2: オオタカ
2015.10.15
木更津市

ンク(要保護生物)、2006年改訂版では繁殖地の増加、分布拡大による個体数増加で、Dランク(一般保護生物)に変更、2011年改訂版では個体数増加で、Dランクを解除している。多くの野鳥が減少しているのに、珍しく、数が増えているサギである。

小櫃川でも以前よりも観察数が増えていたのだが、ここ2~3年、あまり見なくなった。悪声は別として小櫃川の浅瀬で優雅な姿をいつまでも見せてほしいと思う。

参考文献

- ・千葉県の保護上重要な野生生物~千葉県レッドリスト(動物編) 2006年改訂版
- ・千葉県の保護上重要な野生生物~千葉県レッドデータブック~動物編 2011年改訂版

(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

編集後記

鳥類にしても植物にしても、記録を取り続けることではじめて変化が把握できる点は共通なのですね。今の世代しか取ることのできない、今の記録。それが将来の世代にとっても大切な記録になることに気付かれます。

さて、本年度最後の号になりました。例年のような博物館活動ができなかった一年でしたが、来年度こそ、今まで蓄えてきたものが実る年となるように願っております。

(千葉友樹)

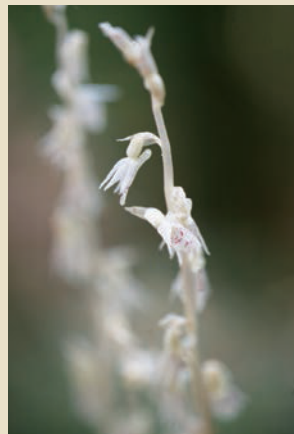


写真2 タシロランの花

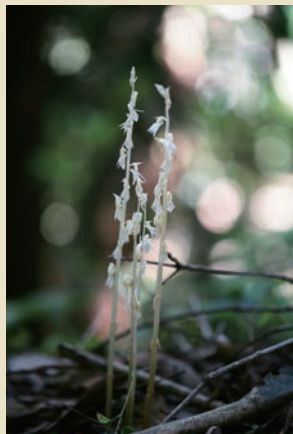


写真1 タシロラン

タシロラン (*Epipogium roseum* (Don) Lindl.) はラン科トラキチラン属に属し、日本のほか、中国南部、台湾、インドシナ、インド、マレーシア、オーストラリアなどに分布します。タシロランは普通の植物のような緑色の葉を持たず、自分では光合成をしません。その代わりに、生きるために必要な栄養は共生しているキノコから得ています。タシロランという変わった名前は、人名からつけられたものです。田代善太郎(1872-1947)は当時の植物分類学の大家である牧野富太郎(1862-1957)のもとで植物について勉強した植物研究家・採集家です。田代は、全国の植物を採集して歩き、新種も沢山発見しています。明治39(1906)年に田代は長崎県でランの一種を採集し、牧野に送りました。牧野が調べたところ、そのランは日本新産であることが分かり、タシロランと名付けられました。タシロランは比較的稀な種とされ、環境省のレッドデータブックでは「準絶滅危惧(N-T)」に選定されており、多くの都府県でも保護すべき対象種に選定されています。しかし、タシロランの分布の変遷を調べると、近年になってその分布を北に拡大しているようです。関東地方で最初に発見されたのは1958年に神奈川県鷹取山で採集された標本で、当初はアキザキヤツシロラン(*Gastrodia confusa* Honda et Tuyama)と報告されました(大谷1959)。タシロランは

その後、神奈川県内で増加傾向にあるとされます。千葉県でタシロランが記録されたのは比較的最近で、「千葉縣植物誌(1958)」「新版千葉県植物誌(1975)」「千葉県植物ハンドブック(1981)」にはタシロランはリストされておらず、1993年に千葉市内で発生したことが最初の報告と考えられます(岩瀬・福田1996)。その後、「千葉県の自然誌別冊4 千葉県植物誌(2003)」では3ヶ所、「千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドデータブック―植物・菌類編(2009)」では「要保護種」とするとともに、千葉県内で14メッシュが記録されています(※メッシュとは、千葉県全域を縦横およそ1キロに区切った格子のことで、千葉県レッドデータブックでは植物の分布を表すのに使われています)。千葉県立中央博物館植物標本室(CBM)を調べたところ、最も初期に採集されたのは1993年と1995年に千葉市内で採集されたものです。しかし、1997年に安房郡和田町(現在の南房総市和田町)で採集されて以降は房総半島南部から多くの標本が採集されるようになります。房総半島南部では2000年までに採集された標本は5点(3ヶ所)だったのに対し、2003年から2022年までには18点(15ヶ所)が採集されています。これはタシロランが近年千葉県、特に房総半島南部で着実に広がっていることを示唆していると考えられます(山本ほか

参考文献
千葉県立中央博物館「1958 千葉縣植物誌」3:5 pp. 千葉県生物学会、千葉
千葉県立中央博物館「1975 新版 千葉縣植物誌」5:67 pp. 井上書店、東京
千葉県立中央博物館「1981 千葉縣植物ハンドブック 植物目録」分布・類似植物の識別 215 pp. 千葉県生物学会、千葉
千葉県史料研究財団(編)2003 千葉県の自然誌 別冊4 千葉縣植物誌 1181 pp. 千葉
岩瀬 徹 福田 洋 1996 タシロラン (*Epipogium roseum*) が千葉市内に出現した。千葉生物誌 45(2): 28.
大場達之 2009 タシロラン、所収「千葉県レッドデータブック改訂委員会(編)千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドデータブック―植物・菌類編 2009年改訂版」308 千葉県環境生活部自然保護課、千葉
大谷 茂 1959 三浦半島種子植物の検討(其の三) 横須賀市博物館研究報告(自然科) 19:25.
山本伸子、天野 誠、池田 博、任 煙、早 2016 千葉県南房総市でタシロランを採集す。千葉生物誌 65(2): 43-49.
(山本伸子)

コラム

房総丘陵の動植物(24)

房総丘陵の新参者 ―タシロラン―

6月のある日のこと、オガタマノキというモクレンの仲間の植物を探しに南房総市に調査に出かけました。ありそうな場所を探してまわっているうちに、常緑広葉樹林の林床に白っぽい植物が数十本生えているのが目に入りました。タシロランです(写真1)。高さ20cmから40cmの花茎に5個から13個ほどの花をつけていました(写真2)。

タシロラン (*Epipogium roseum* (Don) Lindl.) はラン科トラキチラン属に属し、日本のほか、中国南部、台湾、イ

ンドシナ、インド、マレーシア、オーストラリアなどに分布します。タシロランは普通の植物のような緑色の葉を持たず、自分では光合成をしません。その代わりに、生きるために必要な栄養は共生しているキノコから得ています。タシロランという変わった名前は、人名からつけられたものです。田代善太郎(1872-1947)は当時の植物分類学の大家である牧野富太郎(1862-1957)のもとで植物について勉強した植物研究家・採集家です。田代は、全国の植物を採集して歩き、新種も沢山発見しています。明治39(1906)年に田代は長崎県でランの一種を採集し、牧野に送りました。牧野が調べたところ、そのランは日本新産であることが分かり、タシロランと名付けられました。タシロランは比較的稀な種とされ、環境省のレッドデータブックでは「準絶滅危惧(N-T)」に選定されており、多くの都府県でも保護すべき対象種に選定されています。しかし、タシロランの分布の変遷を調べると、近年になってその分布を北に拡大しているようです。関東地方で最初に発見されたのは1958年に神奈川県鷹取山で採集された標本で、当初はアキザキヤツシロラン(*Gastrodia confusa* Honda et Tuyama)と報告されました(大谷1959)。タシロランは

その後、神奈川県内で増加傾向にあるとされます。千葉県でタシロランが記録されたのは比較的最近で、「千葉縣植物誌(1958)」「新版千葉県植物誌(1975)」「千葉県植物ハンドブック(1981)」にはタシロランはリストされておらず、1993年に千葉市内で発生したことが最初の報告と考えられます(岩瀬・福田1996)。その後、「千葉県の自然誌別冊4 千葉県植物誌(2003)」では3ヶ所、「千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドデータブック―植物・菌類編(2009)」では「要保護種」とするとともに、千葉県内で14メッシュが記録されています(※メッシュとは、千葉県全域を縦横およそ1キロに区切った格子のことで、千葉県レッドデータブックでは植物の分布を表すのに使われています)。千葉県立中央博物館植物標本室(CBM)を調べたところ、最も初期に採集されたのは1993年と1995年に千葉市内で採集されたものです。しかし、1997年に安房郡和田町(現在の南房総市和田町)で採集されて以降は房総半島南部から多くの標本が採集されるようになります。房総半島南部では2000年までに採集された標本は5点(3ヶ所)だったのに対し、2003年から2022年までには18点(15ヶ所)が採集されています。これはタシロランが近年千葉県、特に房総半島南部で着実に広がっていることを示唆していると考えられます(山本ほか

2016)。
ある地域にこういった植物が生えていたかを記録するには、押し葉標本をつくるのが一番です。「どこそこに生えていた」と言う人がいても、本当かどうかを確かめることはできません。その点、標本は間違えようがありません。先に紹介した神奈川県鷹取山で採集された植物も、もし標本がなく文章だけが残っていたとしたなら、1958年に見た植物は、いままアキザキヤツシロランとされていたでしょう。博物館に勤めていると、そんなに標本を集めてどうするのか、とよく聞かれます。でも、ある生物が過去のある時にある場所に生育していたこと、それが歴史の中でどのように変わっていったのかを知るには、標本を集め続けることが必要なのです。そして、それが博物館の使命なのです。

特集

房総丘陵の鳥類

冬に種類が多いことと対照的に、夏に繁殖している種類があまり多くないことも房総丘陵の鳥類の特徴です。しかし、北総地域で繁殖期に見られないコサメビタキ、センダイムシクイやトラツグミが、房総丘陵では記録されます。ごくまれにアカショウビンやヤイロチョウが記録されますが、これらの種の繁殖記録はまだ報告されていません。夏鳥でも変化が見られます。かつて、千葉県内ではキビタキ(写真2)の繁殖地は房総丘陵だけでしたが、北総地域でも繁殖期の記録が増えてきました。近年、河川や水田などの湿地で生活するヒクイナ(写真6)やオシドリ(写真7)の繁殖期の記録も増えています。残念ながら、夏鳥として飛来するアオバズクは、激減しているようです(写真3)。

かつて房総丘陵では見られなかった鳥類も記録されるようになりました。南西諸島で繁殖するリュウキュウサンショウクイが、次第に北上してきて、千葉県内各地で時々観察されるようになりました。主に、秋から冬にかけてリュウキュウサンショウクイの記録が多いようですが、近くでは繁殖期でも見られるようです(写真4)。関東では、標高の高い森林で周年生活するといわれているキバシリ(写真7)も、近年、千葉県内で観察記録が増えています。



本来分布していない鳥類も人為的な要因で見られるようになりました。たとえば、房総丘陵各地で外来種であるガビチョウの目撃が増えてきました(写真8)。

このように30年位前と比べると、房総丘陵に生息する鳥類の様子には変化が見られます。みなさんの身近な場所ではどうでしょうか？以前と比べて、何か変化がありますか？お

気付きのことがありましたら、ぜひ、お教えくださるようお願いいたします。

(桑原和之)

参考文献

青木正志・桑原和之、1994 房総丘陵の鳥類相 市原市梅ヶ瀬溪谷・大福山および君津市清和県民の森の鳥類相・自然公園自然環境調査報告書・87―96 千葉県環境生活部自然保護課、千葉。

写真5 アトリの群れとアカマシコ 市原市海上(撮影：田中義和 2012/10/29)

写真6 ヒクイナ 長柄町中野台(撮影：川嶋静雄 2021/7/22)

写真7 キバシリ 栃木県日光市赤沼付近(撮影：布留川毅 2019/5/7)

写真8 ガビチョウ 長柄町船木(撮影：川嶋静雄 2021/12/29)